

日本廻国大乘妙典六十六部経聖の成立とその背景

本 間 文 裕

はじめに

現代では、御朱印ブームが起きており、檀信徒ではない人々がお寺に参拝する機会が増加している。御朱印をスタンプラリーのように考えている蒐集家も多く見られるのは事実であるが、スタンプラリー化したとはいえ、蒐集家が寺院に参拝する動機が増えることは、布教活動の場が檀家や信徒だけではなく、そのご縁から新たな法華経の結縁を結ぶ機会となるのではないか。

また、世間では輪廻転生を主題とする映画や漫画等が流行し、人は死後に生まれ変わるのか、またどこへ行くのかという若者たちの死後の転生観も高まっているのではないかと感じられる。例えば、それらの作品の登場人物が過去の生からの因縁を持つ設定や異世界での転生を扱ったストーリー等を法華経的に伝えていくことは、現代の若者たちが自己の存在意義や人生の目的について考えることに繋がり、輪廻転生の考え方がその探求を助ける手段として受け入れられていく可能性は否定できない。社会の不安定さや経済的な困難が増える中で、若者たちは現世以外に希望を持ち心の平穏を求める傾向があり、輪廻転生ということに関心があると考えられる。これらの見解の示し方によって、その興味を持つ人々に対しては大きな布教の一つとなることは言うまでもない。

今回は、御朱印の起源にあたる「納経請取状」や輪廻転生に関する「縁起本」が多数存在している日本廻国大乘妙

典六十六部経聖について考察する。

日本廻国大乘妙典六十六部経聖

まず、最初に日本廻国大乘妙典六十六部経聖とは、どのような人たちのなにかということについて見ていくことになる。

日本廻国大乘妙典六十六部経聖における納経の起源については具体的には不明とされているが、全国六十六の国々（老岐国・対馬国を除く）に設置されていた国分尼寺等の寺社に、法華経六十六部を写経して納経する修行者のことを言う。納経については、法華経の書写を通じて功德を積む行為であり、廻国という苦行によって懺悔滅罪の功德を得ることを目的としていたと考えられる。略して六十六部廻国聖とも呼ばれ、江戸時代には更に略されて六十六部もしくは六部と呼ばれた。以下六十六部と称す。

六十六部による納経は、各国の霊場には納経場所が設けられ、鉄塔の中に経筒を入れて納経したり、地面に経筒ごと埋めたりした為、現在も全国各地にこの廻国供養碑を見ることができるともいえる。

その後、江戸時代には単なる廻国聖または遊行聖となってしまうが、中世には法華経六十六部を如法に写経し、これを日本全国の霊仏霊社に納経するために廻国したのである。

信仰のために六十六部廻国に出る者もあり、廻国の途中で信者ができればその村の堂や庵に定着して一生を送ることもあり、このような六十六部が村人に勧進して他の修行者の納経の為に建てたのが廻国供養塔である。

近世の廻国納経の札所では、実際の法華経の写経より納経札を納めるようになったが、これは三十三所観音巡礼や四国八十八カ所遍路に踏襲されたとされている。西国三十三所観音霊場の巡礼納経にならって六十六部納経したとも考えられ、日本全国六十六カ国を巡ることの起源には諸説があるが、国分尼寺が法華滅罪の寺院ということもあり、

六十六カ国の国分尼寺を廻り法華經書写と納経によって、懺悔滅罪と五穀豊穡を祈ったものと考えられる。

これにより、江戸時代には、故郷で罪を犯して滅罪のために六十六部となって廻国に出て、一生を六部の修行に人生を費やす者もあったとされている。そして六十六部の終焉の場を提供したのが、京都東山鳥辺野の宝福寺を中心として、六部墓というものがあつたことがわかつている。

実際に六十六部の廻国納経が盛んになったのは室町時代からで、特に近世に流行し巡礼の姿は覆鉢型の笠をかぶり、ねずみもめんの衣をつけて帯の前に鉦（かね）をたらし、厨子（ずし）を背負うというものであつた。

お廻国様

西海（二〇〇七）によると、「風水害やいなごの大発生により、天明の大飢饉が起こつた時、国内の安泰を祈願して全国を行脚する六十六部が愛媛県北宇和郡鬼北町中野川地区付近にさしかかつた時に、行き倒れになり地元の人が村をあげて手厚く葬つた。六十六部の名前が分からなかつた為、お廻国様と名付けた。」とあり、六十六部に対する民衆の敬意の現れを感じることができる。六十六部は廻国中にそれぞれの土地に根差し、地元の住民の依頼に応えることも数多くあつたとされる。

日本風俗図絵



六十六部の供養塔について

小嶋「二〇二二」によると、二〇二二年八月三十一日現在で六十六部供養塔は一万三百九十件を数える。

全国各地には六十六部の修行者が勧進活動を通じて建立した供養塔が数多く存在し、亡くなった行者や地元の人々の為の祈りと追悼の場として建立され、宗教的な意義が深いものである。供養塔は六十六部

が諸国を巡る中での宗教的な活動と、地域の人々との交流の証としても重要である。

また、供養塔は地域社会における共同体の絆を象徴するものでもあり、我々もその供養塔を訪れることで、現代の私たちも過去の信仰と文化を感じることができるとのである。

六十六部の成立時期について

六十六部の納経がいつ頃から行われていたかという成立の時期について小嶋「二〇二二」は、

・「六十六部に関する明確な資料は十三世紀鎌倉中期から現れる。その初見は寛喜三年（一二三二）伊賀黄滝寺（現・三重県名張市の黄滝山延寿院）の納経請取状とするのが通説である。ついで、弘安三年（一二八〇）安房清澄寺の納経請取状が確認されている。」

・「鎌倉期にはすでに六十六部の廻国納経が一定程度浸透していたことを窺わせる。」

東和南市に伝わる六十六部供養塔

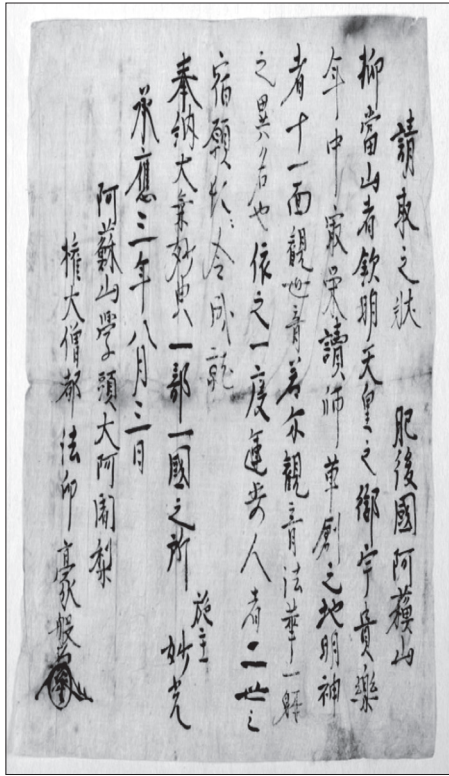


・「福岡県糟屋郡久山町の白川神社経塚（白山山頂）出土と伝わる天仁二年（一一〇九）銘の経筒に、如法妙法蓮華經六十六部内書写の文字があることが確認されている。」

以上のことから考えると、六十六部による廻国納経は明確ではないが、平安時代後期には六十六部が登場していたことになる。

納経請取状について

御朱印や納経帳は巡礼者が寺院を訪れた証として納経所で受け取る書状や印のことであり、四国八十八箇所巡りなどの巡礼では、各寺院で納経帳に印をもらうことが一般的である。この印は、巡礼者がその寺院を正式に訪れ、お参りをしたことを証明するものであるが、本来の六十六の納経請取状とは、法華経を一部書写したものを納経の証として受け取っており、このような納経請取状は全国各地に存在している。



阿闍梨寂澄自筆納経札

中でも、前記した日蓮聖人の故郷である安房清澄寺において、弘安三年（一一八〇）に院主阿闍梨寂澄にて発行された納経請取状は、慈覚大師円仁の開山と伝わる

「聞持感応之霊場也」とあり、虚空藏菩薩求聞持法を修する霊場として知られていたことを示している。

弘安三年（一二八〇）五月は、日蓮聖人が身延山に御在山中の時期であり、清澄寺が六十六部の霊場ということであれば、日蓮聖人幼少期のご修行時代にも、六十六部による納経が行われていた可能性があると考えることができる。

房州 清澄山

奉納

六十六部如法経内一部

右、当山者、慈覚開山之勝地

聞持感応之霊場也、仍任

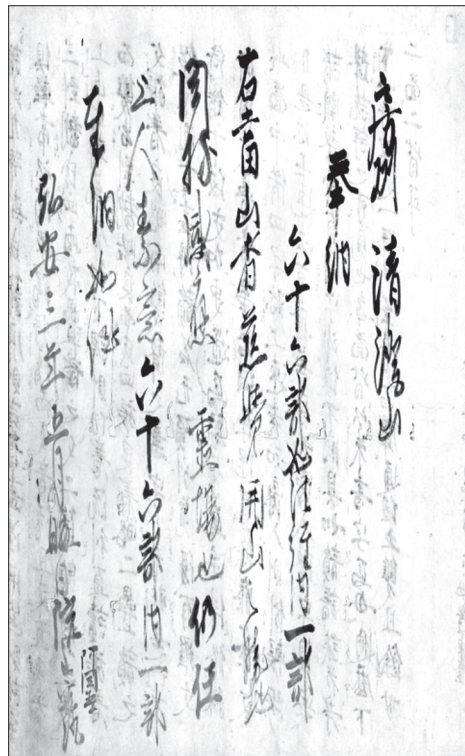
上人素意六十六部内一部

奉納如件

弘安三年五月晦日 院主阿闍梨寂澄

六十六部縁起と源頼朝転生譚について

次に、六十六部の縁起には源頼朝の転生譚があり、源頼朝が前世において「頼朝房」（らいちようぼう）として六十六部廻国聖としての修行の功德により、鎌倉幕府の行政を主導した源頼朝という大將軍に転生したという縁起本がいくつか存在している。



安房清澄寺納経請取状 阿闍梨寂澄自筆納経札

小嶋「二〇二二」によれば、数ある六十六部縁起本の中でも、日光山輪王寺所蔵の六十六部縁起本が最も古い完本になり、その縁起は大きく分けて輪王寺本系縁起と近世刊本系縁起の二つの異なる形態に分けることができる。」とされている。

また、〈六十六部縁起は中世に登場した輪王寺本縁起と近世中期以降に広く流布した、近世刊本系の縁起では内容に違いはあるが、基底には一つの物語「頼朝房廻国納経と頼朝への転生」について書かれている。〉と述べられている。

【輪王寺本系縁起の内容】

輪王寺本縁起の内容としては、平家のために所領を奪われた伊豆の住人である新平三という人が、出雲大社に百日参籠して本領安堵を祈念していると、ある暁の夜に頼朝房たちが過去世において、六十六部廻国納経を修行した功德があることを告げる老翁が神殿から出現し、かつて頼朝房という聖が大社の回廊の内に勤行して六十六部如法経を書写供養し、六六カ国に奉納して一切衆生を結縁せしめんとしていた。また、本願大聖の頼朝房のほかに、替聖時政房、小聖景時房という（同行）の聖がおり、さらに平太夫広元という檀那がいた。彼らは成仏疑いなきところ「有相の福力」を好んだため、それぞれ將軍頼朝、北条時政、梶原景時、大江広元と転生した。新平三は、回廊の後ろの経塚に証拠の経筒を確認し、啓示のとおりに景時に訴えたところ、はたして本領安堵が叶った。この一件は出雲大社の国造が夢告を得て関東に注進したもので、これを聞いた頼朝は、自らの前世が六十六部聖であったことを喜び、法華堂（法華堂）を建立して自像を安置させ、やがては極楽往生を遂げた。」¹という内容になっている。

【近世刊本系縁起の内容】

近世刊本系縁起の内容については、「過去に頼朝・時政・景時の前世たる三人の聖がいた。また、義経の前世は大和の社に籠る赤い鼠であった。鼠は景時房の笈の中に入り、廻国中に経典を食べてしまった。鼠は廻国の功德によって、牛若と生まれ変わったのであるが、景時は経典を食べられたことを憎み後世において、彼を兄頼朝に讒言した（する）」というのである。」

輪王寺本縁起と近世刊本系縁起はともに頼朝の転生を話の基盤に据えながらも、前者が所領安堵を祈る新平三の夢告譚を中心に展開し、頼朝の法花堂（法華堂）建立に説き及ぶのに対し、後者は義経一統を含む多くの武士を登場させ、かつ義経・梶原の確執の因縁を語るのが大きな特徴となっている。²⁰

また、輪王寺本に記載されている六十六部の縁起の中にある、源頼朝転生譚は「太平記」第五にある「時政參籠榎鳥事」が影響しているとされている。

その他にも多数の縁起本があり、輪王寺本系では「敬白」で始まる表白文の形をとっており、人々の前で読み上げて六十六部納経への結縁を進めるといふ勧進の目的で作成されている。近世刊本系でも表白文の形式は取っていないが、勧進の目的であることは間違いないことがわかる。

六十六部と御朱印

御朱印の起源を考えると、まず江戸時代の納経帳にあり、さらに遡ると六十六部廻国聖、いわゆる六十六部の「納経請取状」に行き着く。納経帳は六十六部から始まったもので、後の四国八十八ヶ所や西国三十三所の納経帳も六十六部の納経請取状から派生したことになり、御朱印は六十六部に由来すると言っても過言ではない。

ところが、六十六部は明治の初めに禁止された為、現代一般にはあまり知られない結果となっしまいました、これまで

御朱印の起源としての六十六部が見落とされてきたと考えられている。

現在、四国八十八ヶ所に関して存在する最古の納経帳として知られているものは、空性法師の宝永八年（一七一）から正徳元年（一七一二）にかけての納経帳だが、これは六十六部の廻国巡礼の一環として四国・西国を巡拝したものであることが指摘されている。それ以外でも、十八世紀前半の納経帳はいずれも六十六部のもので、四国や西国の巡礼者の納経帳は十八世紀後半に登場する。

もともと六十六部は日本全国六十六ヶ国を巡り、それぞれの国を代表する寺社一ヶ所に法華経一部を納経するといふ行者だったが、十八世紀に入った頃から一ヶ国一ヶ所にこだわらなくなり、四国・西国・板東・秩父などの霊場を組み込むようになり、それらの札所でも納経は行われたが、それを見た四国や西国の巡礼者も六十六部を真似て納経帳を携行するようになった^③と指摘されている。

スタンプブームとしての御朱印

御朱印研究所の見解によると

神社仏閣で参拝の証しとしていただく記帳押印を「御朱印」と呼ぶようになったのは、昭和の初めのことである。

それまで、寺社でいただく記帳押印に決まった名前はなかったとされており、寺社でいただく印を「御朱印」と呼ぶようになった背景として考えられるのが、昭和初期に起こった空前のスタンプ（集印）ブームであるとされている。

これによって登場したスタンプ蒐集家たちは、神社や寺院でいただく印も、スタンプの一種のように扱ったようである。このような風潮に対する危機感から、一般のスタンプや記念印と差別化しようとしたと考えられ、その一環として「御朱印」と呼ぶようになったと考えられる。昭和初期に現代のような「御朱印」がほぼ確立した時代とい

うことができるだろう。⁽⁴⁾

と述べている。

人はなぜ寺社に参るのか

寺社を参拝することには、法事・葬儀・供養・祈願・相談・説教の聴聞・観光・初詣・御朱印など、他にも多数の理由があり、人々が寺社に対して施しを求めることが挙げられる。

しかしながら、寺社に対する一般の見解として、敷居が高く簡単に参拝することができないという抵抗感を抱く人は多く存在している。

神奈川県立博物館臨時学芸員の佐藤登美子氏は、

「我が身を振り返ってみると、若い頃から今に至るまで、なんだかんだと寺宝社宝の調査の仕事にずっと携わっています。また旅行ともなればその土地の有名無名の神社やお寺に参詣することを当たり前の習慣としています。寺社参りは仕事ではあるけれど、個人的な楽しみでもある。そこにある文化財を調査しなくちゃいけないから、というのとは単なる口実なんじゃないかな、と思う時があります。（中略）俗世間とはちがう空間のありよう、つまり聖域にただ身を置くこと、それにより何だか自分の内側が刷新されたような気持ちになること。その清々しさに一度身を浸したら、なかなかそこから逃れられないのではないのでしょうか。⁽⁵⁾」

と述べられており、寺社が持つ独特の空間や風情が人々に癒しを与えることができるということは、現代社会で疲弊

する人々にとっても大きな居場所となることができるのではないだろうか。

寺離れが進む中で、寺院は御朱印の蒐集家たちをただの蒐集家として扱うのではなく、心の居場所を提供し、エネルギーを補給してもらえようような施設となることを目指し、寺院という空間が現代社会の若者の新たな居場所となることができれば、寺院の存在価値も上がり新たな布教の場とすることも可能となるのではないか。

まとめ

以上のように、六十六部の成立の背景には曖昧な部分が多いが、民衆の中に受け入れられていたことが伺え、巡礼を志す人々もかなりの数があったことは事実である。六十六部は法華経を書写し、六十六カ国の霊場に納経する大きな功德を宿縁とし、善き処に転生したいという思いにより、多くの六十六部の修行が行われてきた経緯を考えると、こうすればこうなるという六十六部の縁起本に示されているような、はっきりとした利益を見出していくことは、今後の布教に必要となるのではないだろうか。目の前の現世利益だけを追求することは、法華経の教えに反することではあるが、ある程度の見通しがあるご利益として、心の居場所や神聖な場所に身を寄せる安心を提供できる場所として、寺院側がその在り方を考える一つの手段として、御朱印や転生を信じる若者に目を向けていくことが必要と考えられる。現在の御朱印は、スタンプリー的な要素はあるにしても、寺社の神聖なる空間に触れることによつて、ストレス社会と言われる現実から解放されるというメリットを含んでいる。

また、六十六部は源頼朝の転生という縁起を中心に大きな功德を積むための廻国修行であり、転生への願いと御朱印の起源であることの背景を伝えることにより、現代の若者が、信仰に対する興味を持つ可能性は捨てきれない。

寺院側もただ御朱印を発行するのではなく、その起源や歴史を感じながら神聖な場所を提供する気持ちで御朱印を発行することが大切であり、六十六部の廻国納経の精神を伝えることで、若い世代の人たちを日本の宗教的な風習と深

く結び付けることができれば、信仰や文化についても深い理解が得られるのではないかと考える。

註

- (1) 『六十六部日本廻国の研究』小嶋博巳 二〇二二年 法蔵館 十九頁―二十頁
- (2) 『六十六部日本廻国の研究』小嶋博巳 二〇二二年 法蔵館 五二頁
- (3) 御朱印の歴史(1) 御朱印の起源―六十六部― 古今御朱印研究所 (goshuin.net)
- (4) 御朱印の歴史(5) スタンプブームと御朱印― 古今御朱印研究所 (goshuin.net)
- (5) 金銅六角経筒―神奈川県立歴史博物館 (kanagawa-museum.jp)

参考文献・資料

- ・『日本廻国大乘妙典六十六部経聖』― Wikipedia
- ・『六十六部日本廻国の研究』小嶋博巳 二〇二二年 法蔵館
- ・『江戸の漂泊聖たち』西海賢二 二〇〇七 吉川弘文館
- ・『改訂新版 世界大百科事典』二〇〇七 平凡社
- ・※一 『日本風俗図絵』（国立国会図書館デジタルコレクション） <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1266553/32>
- ・※二 東大和市に伝わる六十六部供養塔 <https://higashiyamato.net/higashiyamatonorekishi/4461>
- ・※三 奈良市中ノ庄町中ノ庄経塚出土『東京国立博物館』（画像番号E0084375) <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0084375>
- ・※四 安房清澄寺納経請取状 早稲田大学図書館文庫 (12 00021 0002 0003)
- ・御朱印の歴史(5) スタンプブームと御朱印―古今御朱印研究所 (goshuin.net)
- ・御朱印の歴史(1) 御朱印の起源―六十六部―古今御朱印研究所 (goshuin.net)
- ・金銅六角経筒―神奈川県立歴史博物館 (kanagawa-museum.jp)